

「勝利の入城」

ルカ 19 : 29～44

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの公生涯は、3年半続いた。
- ② ついにイエスは、メシアとしてエルサレムに入城される。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 128a ベタニヤに到着 (ヨハ 11 : 55～12 : 1, 9～11)

§ 128b 勝利の入城 (ルカ 19 : 29～44)

(3) ベタニヤに到着

- ① マルタ、マリア、ラザロの家がある。イエスはそこに滞在された。
 - * 過越の祭りの間、エルサレムの町の周辺にテント村が作られた。
- ② ベタニヤからエルサレムまでは徒歩で行ける距離である。
 - * その途中に、ベテパゲがある。
- ③ この時点で、祭司長と律法学者たちは、イエスを殺そうとしていた。
- ④ それは、一般民衆にも広く知れ渡っていた。
- ⑤ 祭司長と律法学者たちは、イエスを見た者は報告せよとの命令を出していた。
- ⑥ イエスがベタニヤに着いたとの噂が流れ、大ぜいのユダヤ人がやって来た。
- ⑦ イエスだけでなく、ラザロを見るためでもあった。
- ⑧ 祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。

2. アウトライン

- (1) 入城の準備 (29～35 節)
- (2) 人々の歓迎 (36～38 節)
- (3) パリサイ人たちの抗議 (39～40 節)
- (4) イエスの嘆き (41～44 節)

3. 結論

- (1) 勝利の入城と過越の祭り
- (2) 勝利の入城と仮庵の祭り
- (3) 勝利の入城とイエスの感情

勝利の入城の意味について学ぶ。

I. 入城の準備 (29～35 節)

1. 29～31 節

Luk 19:29 オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、

Luk 19:30 言われた。「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が見つからないので気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。

Luk 19:31 もし、『なぜ、ほどくのか』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』

(1) 「勝利の入城」と呼ばれるが、実態はそうではない。

①民衆は、メシア的王国の設立を期待していた。

②イエスは、十字架に向かっておられた。

(2) ベテパゲとベタニヤからは、エルサレムは目前にある。

①イエスが弟子を派遣する時は、ふたり一組が多い。

(3) イエスは、ろばを必要とされた。

①ゼカ9:9の預言の成就である。

「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに」(ゼカ9:9)

②ろばは、祭司、貴族、平和の使者たちの乗り物である。

③王の乗り物は、馬である。

④イエスは、平和の君としてエルサレムに入城される。

(4) 所有者たちとは、あらかじめ打ち合わせができていたのであろう。

①「主がお入り用なのです」という言葉がすべてを解決する。

2. 32～34 節

Luk 19:32 使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。

Luk 19:33 彼らがろばの子をほどいていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか」と彼らに言った。

Luk 19:34 弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。

(1) イエスが話された通りのことが起こった。

①所有者は、複数形である。「所有者たち」である。

- ②彼らが、ろばと、ろばの子を大切にしていたことが分かる。
- ③メシアに自分たちの持ち物を提供できるのは、特権である。

(2) イエスの貧しさは、読者に好印象を与えた。

- ①当時の人たちの大半が、初代教会の信者も含めて、非常に貧しかった。
- ②ろばの子を借りなければ入城できないメシアに、親近感を覚えたことであろう。

3. 35 節

Luk 19:35 **そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。**

(1) ろばの子の上に上着を敷くのは、鞍を作るためである。

(例話) ベエル・シェバのベドウィンテントでの体験

(2) **マタ 21 : 7**

「そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた」

- ①母親がろばの子のそばを歩いた。
- ②弟子たちは、ろばと子の両方に上着を掛けた。
- ③イエスは、両方に乗られたのであろう。交互に乗られたのであろう。
- ④ろばの子が暴れないのは、小さな奇跡である。

II. 人々の歓迎 (36~38 節)

1. 36 節

Luk 19:36 **イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。**

(1) オリーブ山の西側をエルサレムに向かって下って行かれる。

①下り切った所が、ケデロンの谷である。

(2) 道に上着を敷くのは、王に対する表敬である。

「すると、彼らは大急ぎで、みな自分の上着を脱ぎ、入口の階段の彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、『エフーは王である』と言った」 (2列9:13)

①ニムシの子ヨシャパテの子エフーは、ヨラムに対して謀反を起こした。

2. 37~38 節

Luk 19:37 **イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、**

自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、
Luk 19:38 こう言った。／「祝福あれ。／主の御名によって来られる王に。／天には平和。
／栄光は、いと高き所に。」

(1) 弟子たちの群れが叫んだ。

- ①彼らは、多くの奇跡を目撃してきた。
- ②そのことのゆえに、大声で神を賛美し始めた。
- ③およそ1年前のガリラヤで、イエスを王にする試みは失敗していた。
- ④今こそイエスは、メシアとして自分を表し、メシア的王国を建設される。

(2) 賛美の内容

「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に」

①「主の御名によって来られる王」とは、メシアのことである。

「【主】の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは【主】の家から、
あなたがたを祝福した」(詩118:26)

②ルカ2:14との対比

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々
にあるように」(ルカ2:14)

*ここでは、「地の上に」という部分が書かれていない。

*その成就是、まだ先のことである。

③以上のことは、通常の巡礼者を歓迎する内容ではない。

*パリサイ人たちは、危機感を覚えた。

Ⅲ. パリサイ人たちの抗議 (39～40節)

1. 39節

Luk 19:39 するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかってください」と言った。

(1) パリサイ人たちは、何が起きているかを理解した。

- ①イエスは、自分自身をメシアとして公にしている。
- ②弟子たちは、メシアを歓迎する聖句を引用して、大声で叫んでいる。
- ③人々も、イエスをメシアとして歓迎している。

(2) パリサイ人たちはすでにイエスのメシア性を拒否していた。

①弟子たちを叱って黙らせるように、イエスに要請した。

2. 40節

Luk 19:40 イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

(1) イエスは、弟子たちを叱らなかった。

①これまでは、「今見たことを言うてはならない」という命令があった。

(2) 人間が黙ったとしても、無生物である石が叫び出すことであろう。

①石とは、どんな石でもよい。

②特にここでは、城壁の石、あるいは神殿の石を指すと思われる。

IV. イエスの嘆き (41～44節)

1. 41～42

Luk 19:41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

Luk 19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。

しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

(1) イエスはエルサレムを見て、泣かれた。

①外面的繁栄と内面的腐敗(不信仰)の対比

(2) ルカ 19:42 の訳文の比較

「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている」(新改訳)

「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない」(新共同訳)

「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……。しかし、それは今おまえの目に隠されている」(口語訳)

「永遠の平和が、すぐ手の届くところにあったのに、あなたはそれをはねつけてしまいました。もう遅すぎます」(リビングバイブル)

①「平和への道」とは、イエスをメシアとして信じる道である。

②しかし、ユダヤ人たちの霊的目が盲目となっていた。

③エルサレムがイエスを拒否したので、イエスもエルサレムを拒否される。

2. 43～44節

Luk 19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

Luk 19:44 **そしておまえと其中的子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」**

- (1) 紀元70年に起こることの預言である。
 - ①敵がエルサレムに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せる。
 - ②エルサレムの住民を虐殺する。
 - ③エルサレムは完全に崩壊する。

- (2) その理由は、「神の訪れの時を知らなかったから」である。
 - ①イエスは救いのメッセージを持ってエルサレムを訪れた。
 - ②神の民は、それを歓迎しなかった。
 - ③彼らは、自分たちの考え方や願いを優先させた。

結論：

1. 勝利の入城と過越の祭り

(1) 出12:3~7

Exo 12:3 **イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。**

Exo 12:4 **もし家族が羊一頭の方より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。**

Exo 12:5 **あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。**

Exo 12:6 **あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、**

Exo 12:7 **その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。**

- ①ニサンの月の10日に、家ごとに羊一頭を用意する。
- ②その羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。
- ③それを小羊かやぎのうちから取る。
- ④傷がないかどうか、ニサンの月の14日まで見守る。
- ⑤夕暮れにそれをほふる(午後3時~5時)。
- ⑥その血を、二本の門柱と、かもいに塗る。
- ⑦日没後(ニサンの月の15日)に、その肉を食べる。

- (2) 勝利の入城は、過越の小羊の選り分けである。

- ①ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。
- ②それから4日間、神の子羊イエスは吟味を受け、傷がないことが証明される。
 - *パリサイ人たち
 - *サドカイ人たち
 - *律法学者たち
 - *ヘロデ党の者たち

2. 勝利の入城と仮庵の祭り

(1) 過越の祭りは春の祭り、仮庵の祭りは秋の祭りである。

(2) ヨハ12:12~13

「その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、しゅろの木の枝を取って、出迎えるために出て行った。そして大声で叫んだ。『ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。』」

- ①しゅろの木の枝を用いるのは、仮庵の祭りである。
- ②人々は、メシアの到来は仮庵の祭りの成就であるという理解を持っていた。
- ③この言葉は、詩118:22~27の成就である。
- ④ラビたちは、この言葉はメシアを正式にお迎えする際の言葉であると教えた。
- ⑤ペテロも、同じ誤解をしていた(変貌山の出来事)。

(3) マタ21:9

「そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。『ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。』」

- ①「ホサナ」とは、「私たちを救ってください」という意味である。
- ②「ホシャナ」(ヘブル語)、「ホザンナ」(ギリシア語)
- ③ユダヤ教では、仮庵の祭りにおいて「ホシャナ」の祈りを祈る。
- (4) 以上のことから、人々はメシア的王国の出現を期待していたことが分かる。

3. 勝利の入城とイエスの感情

(1) イエスは、弟子たちの「ホシャナ」の祈りを受け入れた。

- ①イエスは、弟子たちを黙らせなかった。
- ②このような賛美と叫びの声は、歴史の必然である。
- ③イエスがエルサレムに入城された日は、特別な日である。
- ④創3:15の「女の子孫」の約束以来、歴史はこの日に向かって進んできた。
- ⑤イエスの誕生も、バプテスマのヨハネ以来の公生涯も、すべてこの日のために

あった。

(2) イエスはエルサレムを見て泣かれた。

①泣くとは、「クライオウ」という動詞

②大粒の涙と泣き声

③エルサレムが、「神の訪れの時を知らなかったから」である。

④「メシアの生涯」151回目。特別な回である。

⑤イエスは、日本をどう見ておられるのか。

⑥イエスは、私をどう見ておられるのか。